

55 カトリック教会は、聖マタイの召命を再検証すべし。

2023

真鍋友範

1 なぜ再検証が必要なのか。

古い話ではあるが、まずはガリレオ・ガリレイの地動説から始めなければならぬだろう。

ガリレオは、1597年の段階で地動説を信じていたが、カトリック教会は天動説を取っており、まだ地動説が受け入れられる余地はなく、当然弾圧される運命にあった為、17世紀になってから公表したという。

しかし、ガリレオは、1616年に裁判にかけられ、当然のように自説を封印させられた。

その後、ガリレオ・ガリレイの主張する地動説は、驚くことに1992年の現代になって、ヴェネディクト16世の時代、やっと当時のガリレオ裁判が誤りであったことが正式に認められた。

このように、【事実認定に約400年かかった事実を前提にするなら、同様のケースは芸術の分野で発生しても驚くことでもない。】

ここで、この【誤った解釈が是正されない芸術分野での典型例】を紹介したい。

2 聖マタイの召命

この作品は、1600年カラヴァッジョがローマのサン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂コンタレッリ礼拝堂の為に描かれた油彩画だ。



《聖マタイの召命》1600 カラヴァッジョ

本作品に対する公式な解釈の書面は目にしたことがないが、2000年代前半の段階で、ローマ市公認ガイドによるこの作品への解説を聞く限り、聖マタイは中央の髭の男であるようだ。

その当時のローマ市公認ガイドさんの解説によると、マタイは、人差し指を不完全に自分の方に向けている髭の男だそうだ。つまり、完全ではないが、指の方向は髭の男を差しており、イエスに対して「自分ですか」と問い返している、と言う解釈であった。

公式ガイドがローマ・カトリック教会の公式見解に反した解説ができるはずがない。

公式には、聖マタイは、あくまで【髭の男】なのである。

そして、その解釈は、17世紀のイタリアの美術史学者ベッローリの解釈をそのまま受け継ぎ、しっかりとした再検証がなされていないのだ。

つまり、約400年間、再検証なく無責任に放りっぱなし状態である。

しかし、それで良いのであろうか。

この解釈への不満は、1990年代にドイツのアマチュア研究者で発生し、相応の進展見られ、マタイは【うつむいた若者】という結論に至っているが、現在でも確定した解釈に至っていないのだ。

その理由は、要するに、曖昧で主観的な解釈に終始していて、決定的な説得力を持たない為なのだ。

例えば、日本のドイツ学派の美術史家は、イエスは、【力なく指差した】とか、【下方に指を曲げて指差した】などと説明されるが、指を伸ばさない指差し動作や、指を途中で曲げる指差し動作など、世界中で誰も行わない身体動作だから、説得力は皆無なのだ。

正しくは、【イエスは右腕と右手を回して、向こう側の人を示した】と読み取るべき画面なのだ。イエスの手首より先には、力が込められていないし、だれかがその動作を真似て見ても同じく、指は途中の第2関節部で、イエスの身体動作を同様に、折れ曲がるのだ。

【単純に、登場人物の身体動作を真似るだけで、絵画内容、つまりマタイが確定するのに、そこを無視する現在の解釈に至っては、あきれ返るばかりだ。】

カラヴァッジョが、【モデルを使った写実表現】によって、正確に動作を写し取ろうとしているのに、見る側の我々が、登場人物の細部の正確な動作を無視して良いのであろうか、大いに疑問だ。

ズバリ言おう。

【カラヴァッジョがバロック絵画黎明期において成し遂げた画業の真髄が、カトリック教会の怠慢による誤った絵画鑑賞誘導により、台無しにされているのだ。】

私は、もうこれ以上は放置できない、という立場だ。

カトリック教会は、この現状に対し、しっかりどうあるべきかを考えていただきたい。特にイタリアの生んだ超絶才能の画家カラヴァッジョの名誉回復の為に。